臼井吉見

安　曇　野

第五部

筑摩書房

安曇野　第五部

昭和四十九年五月三十日第一刷行発
昭和四十九年八月十五日第三刷発行

©臼井吉見
一九七四

著者　臼井吉見

発行者　井上達三

印刷　大日本法令印刷
製本　鈴木製本

発行所　筑摩書房
東京神田小川町二ノ八
振替東京四一二一三
電話東京二九一—七六五一

(分類) 0093 (製品) 80107 (出版社) 4604

安曇野

第五部

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

その一

早目に昼めしをすませて、みんなでラジオの前に集っていた。

時報につづいて、君が代が、はじまった。おしだまったまま、固唾を呑んでいると、奏楽の終るあたりから、しきりに雑音がまじって、神経をこすられるようで、いらだたしくじれったかった。何か読んでいるらしい声が、遠ざかったり近づいたりで、よく聴きとれない。

「先生さん、これ、天皇さまのお声だろうか？」

この家の主婦が、声を殺してささやく。おびえた表情で、眼が据わっている。

「そうらしいですね……」

一と目で疎開者と見える老人が眼鏡ごしに視線を投げてきたが、ひどく緊張して、眼つき手つきで口をきかないよう制するしぐさをした。

朕は帝国政府をして……とか、そもそも帝国臣民の……とか、皇祖皇宗の……など、耳なれた文句だけがとぎれがちに聴きとれるばかりで、どういうことなのか、さっぱりわからない。書いたものを読んでいるらしかったが、聴きなれない声の抑揚が変だった。

ようやくそれが終って、内閣の告諭があり、情報局総裁の経過発表がはじまった。総裁談には耳もかさず、老人は背のびをするように、
「ウン、これでよし！」
とうなった。
「よかった！　よかった！　よくやった。勝ったら大変だ。敗けて、ほんとうによかったよ」
頬を紅潮させ、眼がかがやき、声は若々しくはずんでいた。
「敗けたんですかい？　日本が……」
とまどって聴きかえす主人に、
「そうですよ！　よくやった、よくやった。これで日本は助かったんだ」
不審の晴れない顔で、夫妻の視線がそそがれているのに答えるように、
「こうしてはいられない、すぐ東京へ帰らなくちゃ……」
石川三四郎がこの村へ疎開してきたのは、三月三十日のくれがたであった。突然上空にB29の一機が現れたとかで、一とさわぎあって、発車が一時間あまりおくれたので、新宿駅を発ったのは、正午近くであった。途中、またもや警報が出て、大月駅でも四五十分待たされた。甲府で身延線に乗換えて三十分、甲斐上野で下車し、七八分歩いて着いたのが山梨県西八代郡上野村の新津友蔵方であった。養女志寿の生家である。
空にとどくかと思われるほど山のてっぺんまで畑のつづく、四十戸あまりの寒村であるが、若者はいうまでもなく、働きざかりの男女をごっそり戦地や工場へ送り出してしまって、村に残っているのは老人と子供と主婦だけであった。現に肥料をかつぎあげた背負子（しょいこ）を肩に、だらだら坂の細道を下り

てくる年輩の主婦に幾人も出会った。案内役の志寿の後から、リュックを背負った三四郎は、道をゆずりながら、今晩は、ご苦労さん、と気軽に声をかけて通った。相手は、暗くなりかけたあたりをすかして、紺のビロード襟の洋服に赤いセーター、黒い中折帽の見知らない老人を怪しみながら、今晩は、お疲れさま、と応えて、うしろすがたが見えなくなるまで見送っていた。

志寿の生家は村の東はずれの高台にあった。ここも弟たち三人を次々に遠い戦場に送って、初老の両親だけでひっそり暮していた。

夕食には案の定ほうとうが出た。太目のうどんに、かぼちゃ、じゃがいも、椎茸、大根、人参をまぜて味噌でごた煮したものである。

「やっぱり本場というより、お母さまの味だねえ、志寿ちゃんもときおり作ってくれたが、こうはいかなかったよ。このこってりした素朴な味はさすがにすばらしい。いのちがのびる思いですよ。どうもご馳走さま」

三四郎はひどく機嫌がよかった。柔和な眼ざしと気さくで静かな話しぶり、両親がとりこし苦労していたにちがいない気づまりな思いは、一瞬にして消え去ったようで、志寿はそれが何よりうれしかった。どう？　いい父でしょう、と生みの親に誇りたい気持であった。

夕食を終えた三四郎は庭さきにおり立った。暗がりに芳香が鼻にきた。梅にちがいなかった。古木らしい枝ぶりに、小さな白い花が点々とくっついている。家の前にそそり立つまっ黒な山の上から夜空がひろがって、しきりに星が瞬いている。こんなにたくさんの星を見るのは久しぶりのことであった。

縁側からあがるなり、三四郎は誰にいうともなくつぶやいた。

「思いきってご厄介になることにしてよかったよ。……静かなんだねえ、昨日までがまるでうそみたいだ」
電燈をつけないままの暗い部屋の中から友蔵の声があった。
「先生がおいでたせいか、珍しく静かですがね、今夜だってどうなるかわかったもんじゃねえです。いまにきますよ」
「え？　こんなところまで？」
「定期便のように毎晩欠かさずくるですよ、爆弾こそ落さないが……」
「メリケンさんも精が出るんですね」
「甲州には、めあての富士山があるんで。あいつらの通り道になってるみたいですよ」
「富士は駿河の山とばかり思ってたが、なるほど、甲斐の山でもありますね」
そういって、三四郎はへっへっと妙に陰気っぽい笑をもらした。
友蔵、たまの夫妻は戦争の見通しについて、しきりに三四郎の話を聞きたがった。
「さて、さっぱり見当がつきませんね。ともかく今度の戦争は、日本の母親にとってとんでもなく大きな試錬ですね」
三四郎は戦争の見通しについては、なぜか話したがらなかった。その夜は疲れてもいたので早く寝た。
はたして夜明け近く、B29十数機が駿河湾方面から侵入したとかで、ごうごうと空を鳴らして通ったが、東京とちがって、とび起きて壕に移ることもなく、聞きすごしていればよかった。志寿に引っぱられるままついて来たかたちだったが、きてよかった、つくづくそう思った。

明けるのを待ちかねて庭に出た。遠く近く鶏のこえのほかはもの音一つしない。屋敷の裏は急な崖で、石を積んで固められている。裾に広がる平原の靄の中をうねる笛吹川が見える。

霜ばしらが、歩くはしから、かすかな音をたててくずれ去る。段々畑の麦の緑が波打ちながら広がっている。散歩に出て、五六百メートル北へ歩くと、不意に五六合目くらいから上の富士の姿を見つけた。その全景が見たくて、野道を歩いて行ったがきりがないので、立ちどまり、深呼吸をやって戻ってくると、もう朝の茶の用意ができていた。

朝飯がすむと、三四郎はさっそく土蔵わきの長屋へ出向いた。長屋は四つに区切られて、厠、薪小屋、物置、味噌小屋にあてられている。その物置が友蔵たちの手で片つけられて、数枚の畳が持ちこまれ、障子も新しく貼り替えられてあった。三四郎はその一隅に小机を据え、先着の荷をといて、本や書類をつめてきた林檎箱十個をそのまま積みあげると、忽ち風変りな書斎に一変した。その頃には、朝日がまっすぐさしこんで、部屋いっぱいに、はなやかな光をまき散らした。

これゃいい、思いきり勉強できるぞ。そう思うと、三四郎は青年のように、気持がはずんだ。戦争は、もう長くはないだろう。だが、馬鹿で、虚栄心を食って生きているみたいな軍部が、早目に手をあげるとは、とうてい考えられない。フィリッピンをとったときさえ、講和の機会をのがしたのだから、行くところまで行くほかあるまい。アメリカが全軍をあげて上陸してくれば、国民は致命的な打撃をこうむるにちがいない。最後の戦線が甲信国境あたりですめばもっけのさいわいだろう。戦争の見通しについて、三四郎の落ちつくところは、それだった。どう思案しても、ほかのかたちは思い浮ばなかった。それまでに、東洋文化史研究だけは、どうあっても、まとめなくてはと思った。本になろうと、なるまいとかまわない、いまできる、自分にふさわしい仕事は、これよりほかはなかった。

東洋文化史研究の仕事は、歴史家たらんとして、研究をはじめたものでなくて、自分の人生観確立のためのものであった。東洋のことに、いかに無知であったかを知って、驚きもし、恥じてもいたのであった。さきに送りつけた荷物は、すべてその関係の書籍と資料であった。疎開した翌日から、午前中は、この書斎にこもって、読書と執筆に没頭した。

午後になると、畑に出て、もっぱら農耕に精を出した。この日課は、東京の家でのつづきで、すこしの変りもなかった。

麦踏みもやり、肥桶もかついだ。五人がめいめい一畝(うね)ずつ受持って、一列にならんで、うしろ手を組み、前かがみになっての麦踏みは、三四郎にとって、はじめて味わう楽しみであった。五人というのは、友蔵夫妻と三四郎、志寿、ほかに、これも疎開同居中の志寿の妹であった。三四郎は絆纏に地下足袋、手拭で頬かぶりをして、友蔵と区別はつかなかった。東京でも、八幡山へ移ってからは、ひきつづき麦は作っていたが、麦踏みの必要はなかった。甲州あたりになると、強い霜がきて、地面が浮きあがるので、根もとを踏みかためなくてはならないのであった。四月になってからの麦踏みは、遅すぎるのだが、人手がないので、晴天には、どの家も総出で麦踏みをやっている。これで雲雀でも鳴けば、申し分がないんだがね。三四郎はそうつぶやいて、背のびをしながら、富士に眼をやると、雲雀ですかい？　この踏んづけた麦が一尺近く伸びないと鳴かないね。ときに先生さん、うまいもんじゃありませんけ、その腰つきは。隣の畑で同じように麦を踏んでいる老爺が、そんな言葉をかけてきた。三四郎の素朴な気軽さは、村の人たちにも親しまれて、忽ち土地のくらしにとけこんで行った。

三四郎の得意は剪定だった。わけても葡萄や林檎のそれについては、フランス仕込みがものをいって、一説も二説もあった。彼が葡萄棚の下で鋏を鳴らしていると、通りがかりの村びとが寄ってくる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ようになった。畑での小昼時はにぎやかだった。先生さん、うちの芋を一つ……。やだよう、先生さんに芋なんか……それよか、この黄な粉むすびどうですか？　ねえ先生さん、この沢庵の味ときたら、東京なんかじゃとても、と呼びかけて、思いきり厚切りのやつをむりやり掌（てのひら）に盛りあげるのであった。テヘ！　これはまたなんと豪勢な！　三四郎はおどけたしぐさで笑わせるのであった。

あとで志寿に、何が先生かわからないでさ。素性を知ったら仰天するだろうナ、と恐縮する三四郎だった。現に疎開してきたあくる日のひるすぎには、早くも市川警察の特高が訪ねてきた。お話をお聞きしたいという。お話？　どんな話をすれゃいいんだ？　近ごろのご感想なり何なり……。感想もくそもあるもんか、アメリカをぶちのめすほかはないよ。吐き捨てるように、そういっただけで相手にならなかった。帰って行く私服を見送りながら、志寿はまだ戦争のはじまらないころ、特高なんかが来なければ、先生の原稿も売れるんだがと誰かに言われて、あんなものが来なくなれば、俺の死ぬときだよ、と笑って答えたことを思い浮べていた。特高は、その後も十日目ぐらいに、お見舞と称して顔を出していた。

疎開の家さがしに来たとかで、大宅壮一、鑓田研一のふたりが、つれだって不意に顔を見せたのは、村のあちこちに白っぽい泡沫のかたまりのような彼岸桜が散り過ぎて、段々畑の緑が、めっきり濃くなったころであった。大宅は、いつもの無造作というよりは汚いなりをして、樵夫（きこり）か何かが久しぶりで山から下ってきたみたいな恰好だった。くるや否や、僕だけ今晩泊めてもらいますよ、と宣言して、その後の東京の被爆情況を一とくさり、にぎやかに語り終えると、三四郎を誘って、三人でそそくさと出て行った。二つおいて次の駅が市川であるが、近在でたった一つの町であるそこに、農民文学につながる鑓田の仲間の石原文雄や山ノ内歯科医がいた。大宅らの来訪は、もともと彼らが目あてだっ

たのだ。わけても山ノ内医院はこのあたりの文学青年たちのたまりであった。三人はそこを目ざして、電車には乗らず、楽しげに談笑しながら歩いて行った。

夕食は向うで済ましてくるとのことだったが、それにしても遅くなった。最終の電車でも帰らなかった。志寿は薩摩芋をふかし、お茶の用意をして、ときどき外に出て、闇をすかし、耳を澄した。大宅と三四郎が帰ってきたときは、十一時をまわっていた。遠くから笑いが聞えたような気がしたので、門口に出てみると、まぎれもない大宅の声だった。さかんにしゃべりながら歩いてくる。懐中電燈の黄いろい灯がゆれている。あれは父のものではない、おそらくぬかりのない大宅が用意してきたものにちがいないと志寿は判断した。豪放粗野のごとく見えながら、大宅が、何ごとにも細かく気がついて、用心深いのに、志寿は日ごろほとほと感じ入るものがあった。

そんな気のくばりや、あけっぴろげの談笑、すばやく情報をとらえ、卑俗でおかしな比喩まじりで解説してくれる才能などには、敬服しないわけにはいかない志寿だったが、こまるのは、あたりはばからぬ露骨な猥談であった。家が近かったので、ときおりぶらりとやってきたが、老若にかかわらず、座に女性がまじっていると見ると、きまって持ち出すのがこれであった。

報道班員として渡ったジャワのみやげばなしにしても、大宅公館には常時ミス・ジャワをはべらせて、どうしたこうしたというぐらいのうちはいいが、リンユウ会の研究会などという話をはじめて、リンユウ？　といぶかる三四郎に、淋しき友の会ですよ、とわざわざ志寿をにらんでおかしがってみせる。淋しき友？　ノスタルジアの友ってことかね、と三四郎が訊きかえすと、貴族はこれだからこまる、リンユウ会、淋病仲間の会ですよ。さしつかえがあるときは、同憂会という別名を使うんですよ、などと言い出すと、次々にけったいな滑稽談に花を咲かせて、とどまるところを知らない。大き

な声で、いたって露骨に語りまくるので、女としても知らんふりはできず、といって一緒に興ずるわけにもいかない。いたたまれぬ思いをさせられるのがつねであった。そんなとき、聞えないふりをして、決して乗って行かない三四郎は、本人が帰ったあとで、君らはニヤニヤして聞いているからいけないんだと、叱るのがつねであった。

大宅がいなくなってから、それをこぼすと、三四郎は、大宅って男は、あんなこと言って、人の気をひいて、その反応をたしかめて喜んでいるんだよ。あれで若いころ、賀川豊彦の洗礼を受けただけあって、案外ピュリタンめいたところがあってね。神経もこまかで、ほんとは気むずかしいんじゃないか、など大宅論の一端をもらすのであった。そのことは、志寿にもわかっていた。石川家の畑のできにいつも心をくばっていて、足らない野菜はだまって届けてくれた。酒、味噌、砂糖、油なども届けてきた。靴も持ってきたし、かまどがこわれると、二人の青年に新しい土のかまどをかつがせてくるというふうであった。大宅さんは、お父さんに何か恩を感じていることがあるんですか？　と訊くと、彼が大学生のころ、飜訳の口を一つ世話したほかは思いあたることはないとのことであった。

それにしても、大宅独特の猥談とデマには何とも閉口だった。大宅さんたら、私どもについて、あれゃ親子じゃなくて夫婦だよ、なんて言いふらしているそうですよ、などと訴えたこともあった。仕方がないよ、大宅君にかかっては、と三四郎は気にもかけないふうであった。

そんなわけで、こんなにおそく帰っても、今夜もまた母親や妹の聞いているところで、得意の猥談でもはじめるのではないかと思うと、志寿は気が気でなかった。

両親は遠慮して寝所にひきこもってしまったし、妹にも赤ん坊が泣くので早く休んでもらった。しかし、大宅はせっかく準備したお茶には手もふれなかった。へんにしんみりしたひそひそ話がつづい

た。滅多に見られない雰囲気であった。

話は戦争の見通しについてであった。根こそぎの破滅による終結というのが三四郎の予想らしかった。かつて父の口からもれたことのない考えだっただけに、志寿は自分の耳を疑った。しかし、それにまちがいないことがわかると、こころの凍るような脅えを覚えないわけにはいかなかった。大宅にも三四郎説を反駁する材料の持ち合せはなさそうであった。むしろ同感のけはいが強かった。だいたい志寿に加勢して、三四郎に疎開を説得したのは、大宅であった。

しかし、と大宅は首をかしげてみせた。しかし、先ごろ小磯内閣のつぶれたいきさつについては、こんなうわさがあるんですよ。いろんな話が伝わってるが、直接の原因は本土決戦態勢が整わぬことだったようだ。どうもほんとらしい。というと？　三四郎の反問に、つまり陸海の対立ですよ。この期に及んでも、両軍の意見がばらばらで、とても調整の見こみが立たないようです。海軍は、もう本土決戦なんてバカなことはあきらめて、もっぱら戦争終結のてだてを考えているらしい。それというのも、海軍には船が一ぱいもないという説がある。ところが陸軍は相変らずの阿呆で、これはもうどうにもならない。最後は大本営を信州の山奥へ移して、天皇にも引越してもらい、これを守ってとことんまで頑張ろうというんだそうです。現に、信州のどこかに、大本営の穴を掘ってるとかいう話があるが、これはかなり確実らしい。そんなわけで、陸海の統一行動なぞ、とんでもないことで、本土決戦も陸軍だけの空念仏に終りそうだ、という見かたがある。そうなればありがたいんだが、先生はどう思いますか？

陸海軍のいがみあいは、東条以来の宿命で、総理と陸相、軍需相と参謀総長、そのほか何だかを兼任して、まるで独裁者の見本みたいだった東条も、指一本ふれることのできない神域があった。海軍

の作戦と軍政がそれですよ。東条が権力を握ったのは統帥権のおかげだが、この統帥権てやつは、陸軍と海軍の二本立てときている。統帥権でおしまくった東条も、その統帥権で悲鳴をあげたという。小磯もこれでキリキリ舞をさせられて、息をひきとったというんですよ。

そこで今度の鈴木貫太郎内閣の目あては、どうみても海軍の考える戦争終結へ持って行くところにあるんじゃないかと考えられるふしが多分にある。僕はそっちに賭けますね。先生の考えるように、アメリカに信州あたりまで攻めこまれなくても済むんじゃないかなア。僕はそう思う。

大宅は一気に弁じたてた。三四郎は終始聴き役で、うなずいているだけだったが、大宅の弁が一段落するのを待って、望みなきにあらず、というわけだね。それにしても、メリケンさんが上陸して、東京ぐらいはとられるだろう、とつぶやいた。そうですよ。僕もそう思う。だから女房や子供たちを疎開させて、こっちの地盤をかためさせ、僕ひとりで八幡山の留守を守って、いざというときまでふみとどまる計画なんです。大宅はそう語り終えると、さあ、もう寝せてもらおうか、と立ちあがりざま、早くも服をぬぎにかかった。

翌朝は、出しておいた浴衣も着ず、サルマタ一つで起きてきて、顔も洗わなければ、歯もみがこうとしなかった。そのまま、座敷に仁王立ちして、庭に出ていた三四郎をつかまえると、大声の早口で世間ばなしをはじめ、いつまでたってもきりがつきそうもなかった。君、風邪をひくよ。ここはまだ寒いんだから……早く着物を着たまえ。たびたび注意されて、はじめて気がついたように、なるほど寒いね、とすぐさま洋服をまとうと、朝めしはまだですか？　とせきたてるのであった。

ひとりでしゃべったり、笑ったり、またたくまに朝食を済ませると、山ノ内医院あたりでふらましたらしいリュックを負って、挨拶もそこそこに帰って行った。山ノ内医院の斡旋で疎開先の目あて

もついたらしかった。
ずいぶんせわしいお客さまだこと！　志寿の母のあきれようといったらなかった。どういうご商売ですか？　ナニ、世田谷の百姓ですよ。甲州の百姓もあの男にはかなわないでしょう、がんばりと根気にかけては。風のようにやって来て、風のように去って行った、この世田谷の百姓をめぐって、一としきり話がはずんだ。
三四郎は志寿に話しかけた。
「自分だけは最後の一瞬まで東京にふみとどまろうていうんだね。固めた地盤を守り通して、こっちはこっちで疎開した家族に新しい地盤を固めさせようて寸法らしい。さすがは大宅君だよ」
「あの人がこんなところへ引っこめるものですか。あれだけの地盤を捨てっぽかして」
大宅が固めた地盤というのは、まさに一個の開拓物語であった。
大宅壮一が、報道班員としての任が解けて、現地からの最後の飛行機で帰国したのは、十八年の十月末であった。
長いこと留守にしていたのに、帰ってきても戦争の話をするではなく、現地ジャワでの暮らしについて語るのでもなかった。何かといえば、いまにもっとひどい食糧難がくるぞ、と家族を叱咤するだけであった。
帰ったあくる日から、三百坪あまりの庭に出て、庭木を片っぱしから引っこぬいては、まわりに移すことをはじめた。自分ひとりの力ではどうにもならないようなのは、若い記者なり編集者の訪ねてくるのを待ちかまえていて、つかまえたら離さなかった。君！　ちょっと手を貸してくれ。済んでから用事は聴くよ。それが済むどころではなかった。たばこもやらなければ茶も飲まない。客好き、話

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com